

巻頭言 — 振り返り —

岩崎千夏(熊本市現代美術館副館長)

2021年度は新型コロナウイルス第4波とともに始まりました。

正体もわからずに息を潜めていた1年前とは私たちの心持ちも少しずつ変化してきましたが、ウイルスも刻々と進化と変化を遂げ、予断を許さない状況が続きました。

3月27日に開幕した「段々降りてゆく 九州の地に根を張る7組の表現者」も、4月27日からの美術館の休館により閉場、数日間でも開けたいという想いも虚しく、再開場することなく会期を終了しました。

「段々降りてゆく」という不思議なタイトルと、黒と銀色に手書き文字の渦巻きに吸い込まれていくような不思議なチラシやポスター。一見すると暗く難解な展覧会のように見えますが、むしろ会場内には若いエネルギーが満ちていました。

タイトルは、熊本出身の詩人である谷川雁(1923-1995)の詩論の一節から取ったもので、出品者は、九州各地それぞれの生きる場所にしっかりと根ざし、思考を深め、表現に昇華している7組の表現者たち。彼らはその土地の自然、家族、自分の住む街、ルーツなど、容易には逃れられないものから目を逸らさず、その核となるところを掴みだし、思考し、形にしようとしています。その姿勢は真摯で、未来に対する希望を感じさせるものでした。

自分を顧みれば、新型コロナウイルスの感染拡大の中、方向性を誰かに決めてもらうことで安心しようとしていたような気がします。国や専門家に判断を委ね、その結果を批判するのは簡単ですが、結局何かが変わるたびに右往左往して、不安感は拭えていない自分がいました。だからこそ、自分の軸を持ち、すっくと立つ彼らが、風向きが変わってもしっかりと根を下ろしてしなやかにびく稲穂のようにまぶしく感じられたのかもしれない。

この展覧会には、実はもう一人出品を検討していたのですが、議論が整わず見送ることになり、その経緯を記録集「[「段々降りてゆく」展における外山恒一展示検討の記録](#)」にまとめました。

美術館は6月29日まで休館し、7月3日からの展覧会「テオ・ヤンセン展」の開会を迎えました。同展はオランダのアーティスト、テオ・ヤンセンが生み出したストランド・ビーストという生命体の展覧会。プラスチックの骨格がむき出しで明らかに物理工学の理論で動いているのに、その動きは生命体としか言いようのない不思議な揺らぎをまもっていました。

ビーストは、海拔の低いオランダの砂浜の砂を掻き上げて海面上昇の問題を解決するために生まれました。風を栄養源として動き、老化し、死んでいきますが、一方で遺伝子を受け継ぎ繁殖しながら、危険を察知して逃げる能力を得るなど、少しずつ進化もしています。また、生みの親であるテオ亡き後も自立して増殖していくために、つい創ったり飼ったりしたくなるよう、人間に愛される術も学んでいます。

会場の中では実際にビーストが動く様子も見ることができ、来場された皆さんからどよめきが起きていました。目をキラキラさせてビーストを見つめていた子ども達の何人がものづくりの楽しさに目覚めてくれたのでしょうか。

また、会場内の映像には、風を掴まえて子犬のように撥ねながら走って行くビーストと、それを追いかけるテオの姿が捉えられていました。70歳を超えてなお、テオはビーストを心から愛し、その進化と繁栄のために貢献しようとしていて、そして楽しそうでした。テオとビーストの姿は、私たちに本当に豊かな人生の過ごし方を教えてくれているような気がしました。

9月末から開催した展覧会は「こわいな!恐怖の美術館」展。

濃いピンクのチラシに田名網敬一の強烈な立体作品。会場内にはおぼけ屋敷があるという触れ込みで、多くの子ども連れの皆さんが来場されました。

現代美術のグループ展としては異例のことですが、美術好きではない人達にも観てほしいという担当者の狙いでもありました。

実は、この展覧会の裏のテーマは熊本地震。

地震から5年を経て、「怖い」という感情を冷静に振り返ることで、恐怖を乗り越える術を考えてみようというものでした。私たちには「怖い」ものが色々あります。地震や台風といった自然災害、暴力や戦争といった人為的な恐怖、暗闇や化け物のような得体の知れないものなど。そのほとんどが、自分の意思でどうにかできるものではなかったり、形がはっきり見えなかったりします。これらの不安や恐怖を形にし、時に笑いに変えながら、人間は数々の恐怖を乗り越えてきたのだと思います。会場内に展示された作家たちも、作品にすることによって客観視しながらも、そこには必ず自己の恐怖との葛藤があったことでしょう。しかし6名のアーティストの「恐怖」の先には、不思議と希望が見えました。私たちもまた、コロナウイルスという見えない恐怖の先に希望を見据えて、みんなで乗り越えていければと思いました。

熊本出身の漫画家、室山まゆみの審査によるアートパレードを経て、年明け2月からは「塔本シスコ展 シスコ・パラダイス かかずにはいられない!人生絵日記」を開催しました。

塔本シスコ(1913-2005)は、絵を勉強したことがあるわけではありません。夫の急逝、自身の体調不良などからのリハビリとして、50歳を過ぎてから絵を描き始め、のめり込んでいきます。彼女の絵を観ることで誰もが幸せな気持ちになるのは、なにより彼女自身が心から楽しんで描いているからにほかありません。

大量に残された絵画に描かれているのは彼女の身近にある植物や家族や彼女自身の思い出にもかかわらず、見る人の心を幸せにします。それは、順風満帆なばかりではなかった人生を、50歳を超えてから自らの力で楽しみ、幸せへと導いた彼女の心の持ちようが、私たちを力づけてくれるからかもしれません。人生100年時代、誰もが老後に不安を抱える時代です。しかし、私たち一人ひとりが自らの楽しいこと、幸せなことを追求することが、ひいてはまわりの人達も幸せにすることができるのであれば、こんなに素敵なことはありません。もしかすると、彼女の生きざまは、超高齢化社会を生きていくための大きなヒントになるかもしれないと感じました。

その他、無料の小会場、ギャラリーⅢでは、「本と人と作品の空間を考える04 シーリング

ファン」、「千原真実個展 風景、鱗片」、「サイドにカッコいいダンサーを—— For creating a dance」等を開催。残念ながら「シーリングファン」（4月7日－6月6日）も、コロナ休館のためわずか18日間で閉場してしまいました。ホームギャラリーという当館の顔でもある空間を考えるシリーズ展として、BGMをテーマとした興味深い展覧会でした。通常音楽は耳をすませて聴くものですが、BGMは聴き流すものです。宮内優里の生演奏による贅沢なBGMは、心地よく耳をすり抜けていきました。

コロナ禍で、無目的でふらっと立ち寄るといった行為が減り、ギャラリーⅢやホームギャラリーを含む美術館の無料スペースは、開館以来もっとも入館者が少ない年度となりました。

出掛けるときは目的を決めて短時間で、買い物も買うものを決めてさっさと終わらせるなど、コロナウイルス感染拡大を防止するための行動が私たちの日常になってしまわないよう心から願います。BGMが流れ、シーリングファンがまわっているスペースで、コーヒーでも飲みながらぼんやりした時間を過ごす、そんな豊かな日常を忘れてはいけなと改めて感じた1年でした。

そして2021年。

美術館にとって、とても嬉しいことがありました。

6月1日、日比野克彦熊本市現代美術館館長が誕生しました。

2007年に当館で個展を開催して以来、中心商店街の皆さんを始め、多くの市民との繋がりを深め、毎年のように熊本に来ていた日比野館長。

早速建築事務所も巻き込んで、街と美術館がにじみ、街を歩いていた市民が自然と美術館に入ってきてくださるようにと、無料スペースのリニューアルを精力的にすすめています。一方で、アートで社会課題を解決したいというビジョンに基づいて、東京藝術大学と協働でシンポジウムを開いたり、商店街と行政の協働ワークショップを受け入れたり、様々な取り組みもはじめています。中でも熊本ならではの取り組みが市役所への御用聞き。市役所の御用は市民の御用として、色々な課のお悩みや御用を聴く「御用聞き」。これからどう展開していくか、楽しみです。

熊本市現代美術館は、2022年に開館20周年を迎えます。

どんなときでも、市民の皆さんの笑顔を思い浮かべ、その笑顔に助けられながら、ここまで歩んできました。

一人ひとりが、豊かで幸せな未来に気づけるように、これからも皆さんと語り合える場を作っていきたいと思っています。